片桐一男著『それでも江戸は鎖国だったのか――オランダ宿 日本橋長崎屋――』
…… 中西　淳朗　118

投稿規定…… 120

編集後記…… 122

《本号の表紙絵》

ボナミ『人体記述解剖学図譜 Atlas d'anatomie descriptive du Corps Humain』第３巻（1850）からリトグラフによる食道の解剖図

ヴェサリウスの『ファブリカ』（1543）の解剖図は木版画によるものであったが，それ以後の解剖図では銅版画によるものが主流となった．人体解剖の現場を再現したビドローの『人体解剖学 105 図』（1685），理想の人体を追究したアルビヌスの『人体骨格筋肉図』（1747）は，ともに銅版画による人体解剖表現の極致と目されている．しかし 19 世紀になって登場したリトグラフという新しい版画技術は，解剖図の意匠を大きく変えてしまった．単色で精細な表現を得意とする銅版画と異なり，リトグラフでは多階調で多色の柔らかな表現が可能となる．とくにフランスでは，リトグラフによる解剖図が好まれ，浩瀚な解剖図譜が出版された．ボナミによる『人体記述解剖学図譜』全４巻（1844–1866）もその一つである．縦隔の解剖を描いたこの図は，独自の構図であり，皮膚，毛髪および体壁の骨，筋だけでなく，動脈と静脈，神経，顎下腺，甲状腺，気管，食道，肝臓などさまざまな器官の質感が見事に描き出されている．リトグラフによる解剖図譜には，フランスではクロケーによる『人体記述解剖学』（1825），ブルジェリによる『人体解剖学全提要』（1832–1854），イギリスではクエインとウィルソンによる『解剖学図譜集』（1842），ドイツではヘンケによる『人体局所解剖学図と記述』（1879–1883）などがあるが，ボナミの解剖図譜の表現力は，それらの中でも際だっている．

（坂井　建雄）